

第4回日本時間生物学会学会報告

柴田重信

早稲田大学人間科学部

昨年(2019年)の11月7日から8日にかけて開催されました第4回日本時間生物学会学術大会は会員の皆様の協力を賜りまして無事盛会で終わることができました。本年は *Clock* や *mPer* など哺乳動物の時計遺伝子が発見され、新聞にもぎわした年であり、このようなときに本学会を主催できたことを大変光栄に思っています。本学術大会の出席者数は約300名であり、また一般演題83題は前年度とほぼ同規模であったと思われます。今回、山口大学名誉教授で日本時間生物学会の会長でもいらっしゃる千葉喜彦先生は教育講演で、リズム研究の注意点と研究視点についてわかりやすく、またリズム研究の歴史にも触れられながら解説されました。今回の特別講演は日本を代表する新進気鋭のリズム研究者、近藤孝男(名大大学院、理学研究)先生にお願いしました。得てして特別講演は外国人を招待しがちであります。まず、日本を代表する研究者にやっていただいて良かったという意見を後日頂戴しました。近藤先生のシアノバクテリアの研究開始はそう昔ではないはずですが、アカパンカビやショウジョウバエの研究を追い越す勢いを感じたのは私だけではなかったのではないのでしょうか。さて、シンポジウムはリズム研究を「創薬から治療薬へ」という視点で開きました。講演者は以下のような方々にお願いしました。平沼豊一(明治製菓、薬品総研)、守屋孝洋(早稲田大学、人総研)、永山治男(大分医大、精神神経)、山田尚登(滋賀医大、精神医学)、内山 真(国立精神神経センター、精神保健研究所)、程肇(東大医科研、ヒトゲノム解析センター)。製薬企業の方にも講演していただいたこともあり、

なかなか活発に質問が出ていまして、非常に盛り上がったタイムリーなシンポジウム企画だったとの評判を得ています。

ここで今回の学術大会の特徴を以下に述べます。(1)基礎系の演題数が多かった。(2)製薬企業など大学以外の研究者等の参加者が例年より多かった。(3)懇親会の参加者、特に若手研究者の参加が多かった(140名)。今回の学会開催での反省点は、「もっと広報活動に力を入れて、他の学会の若手研究者を引き入れる工夫をすべき点である」と思われます。最後に無償で講演していただいた講演者ならびにシンポジスト、さらに学会運営に協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。今年の秋は魚がおいしい玄海の町、博多で皆様再びお会いしましょう。